

伊勢神宮崇敬会だより

みもすがそ

特集

鈴鹿墨

お伊勢さんの歳時記

- 1月1日 歳旦祭
- 1月3日 元始祭
- 1月7日 昭和天皇祭遙拝
- 1月8日 大麻曆奉製始祭
- 1月11日 一月十一日御饗
- 1月31日 大祓
- 2月11日 建国記念祭
- 2月17〜23日 祈年祭
- 2月23日 天長祭
- 3月5日 大麻曆頒布終了祭
- 3月20日 春季皇霊祭遙拝
- 3月20日 御園祭

内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御裳を濯がれたことから「御裳濯川」(みもすがわ)とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による浄書。表紙は、鈴鹿墨の伝統を守る「進誠堂」の工房。

第97号
令和3年 冬



5/原料の煤(スス)と膠(ニカワ)。ニカワを湯煎で溶かしススと合わせる。
6/黒く染まった道具類。木型には加工しやすく反らないナシの木がいいとされる。
7/木型から出した墨は藁灰の中で湿気が除かれる。



固まった墨は藁で縛り、屋内で数週間にわたって自然乾燥させる。



1/木枠に適量の墨玉をはめる。
2/反転して陽刻された蓋をかぶせ、万力で圧をかける。
3/型から出したらバリを取り除いて整形する。
4/陰刻の文字が浮かび上がった状態。型を自作できるとイメージした通りの墨ができるようになる。



墨玉を練る伊藤晴信さん。温度や天気に合わせて水分量を微調整する。

煤と膠を練り合わせ
木型にはめてから自然乾燥
三年寝かせてようやく完成する鈴鹿墨。
冬が最盛期の工房を訪ねました。

特集 鈴鹿墨

千年の時を経ても残る記録材料として、今日まで受け継がれてきた墨。日本へは飛鳥時代、中国から文字とともに墨、筆、紙の筆記具と製作技術が伝えられたといわれています(諸説あり)。

原料は、煤・膠・香料のたった三つ。初期には松の木と松ヤニを燃して煤を得る製法だったので、松が入手しやすい地域で広く墨が作られました。

三重県鈴鹿市もそんな産地のひとつ。鈴鹿の山々に産した肥松を焚いて煤をとる、寺社の集まる奈良へと原料を供給していました。やがて彼の地で製作技術を習得した人々が鈴鹿でも生産するようになった。江戸時代に寺子屋で書が盛んになると一気に需要が高まりました。

他産地が機械化や分業化により量産を図っていたなか、「鈴鹿墨」はひとりの職人が工程を一貫する手作りに徹したこと、日本で唯一、伝統的工芸品指定を受けています。

墨匠の家に生まれて

伊勢街道が通り、白子の海にほど近い鈴鹿市寺家町。「進誠堂」は当地で伝統を伝える最後の一軒です。

ギャラリーに入ると、ほんなりとした和の香り。にじみの美しい書画の向こうから、四代目当主・伊藤晴信さん(33)が現れました。

「延暦年間には作られていたとの記録があり、鈴鹿墨は約千二百年の歴史があります。昭和末期には当地に二十人ほど職人がいたようですが、墨汁が普及するとともに安価な輸入墨の台頭で、どんどん廃業に追い込まれていきました」

進誠堂は昭和二十二年創業。寺家地区では一番遅く、曾祖父から祖父、父へと技が受け継がれてきました。

墨作りのピークは、気温が二十度以下になる晩秋から四月頃。毎年その時期になると、朝三時から工房に出かけ、晴信さんが学校から戻ると既に床に就いて、ほとんど顔を合わせることはない父の仕事を継ぐ気はなかったといいます。

転機は十一年前。東京で漫画家になることを目指していた晴信さんは、「鈴鹿墨、後継者不足」というローカル新聞の記事をネットで知ります。メディアで扱われるほどの問題であったことに衝撃をおぼえた晴信さんは、一年ほど悩んだ末に決心します。平成二十二年一月から父について工房へ入り、翌年には木型を彫る奈良の職人の門を叩きました。

「父は職人ですから工房では口数も少なく、『技は目で盗め』という教え方。でも、『型さえ自作できたらなんとかなる』とアドバイスをくれました」

黒一色の工房

扉を開けると、黒一色の世界。机も壁も天井や照明の傘まで、工房すべてが煤色に染まっています。

墨作りは、まず煤を得ることから。古い時代は、深い山中で松の木を切り、小屋のなかで燃して煤をとる「松煙」でし

たが、今日は植物油や鉱油を燃やす「油煙」が主流です。土器の皿に油を注ぎ、ひも状の灯芯に火をつけて上蓋をかぶせ、そこについた煤を集めるといふもの。進誠堂では、紀州藩の庇護を受けて品質を磨いた和歌山県の煤を、原料として取り寄せています。

膠は、動物の皮や骨、ニベ（結合組織）を煮出してできるゼラチンを固めたもの。プラスチックのように固い膠を一时间ほど湯煎して溶かし、そこに煤と微量の水を混ぜて全体をなじませます。弾力あるモチ状になったら少量の香料を加え、空気が入らないよう手で十二分に練ったのち保温庫へ。一つの型ごとに必要量をちぎり、棒状に丸めてから木型にはめ、万力で圧をかけます。

木型に入れる前の墨に触れさせていただと、ほの温かく、もちもちとした弾力で黒いパン生地のように。木型から出し



3年以上寝かせてようやく墨が完成する。奥は伊藤亀堂さんが開発したカラー墨で、書はもちろん絵画や絵手紙に愛用する人も。

たらフチを削って姿を整え、藁灰の中で湿気をとりのぞいてから数週間、屋内で干し柿のように藁でくくって吊るし自然乾燥させます。梅雨明け後に磨き、上塗り、彩色などの工程を経てようやく一連の作業が完了。さらに最低三年寝かせてようやく墨が完成します。

伝統を守るために

晴信さんの父・亀堂さんは、独創的な墨を世に送り出した開拓者でした。

煤と膠のオリジナル配合により、絵手紙や水彩画にも使える「カラー墨」を開発したり、小学生が授業で墨をする体験ができるよう「一分ですれる墨」を作って市内の小学校へ働きかけたり。よみかきそろばんの風習が廃れ、書道教室すら墨液を用いるところもあるなか、墨の良さを発信し続けました。その精神は、晴信さんにも受け継がれています。

「フランスへ道具一式を持っていき書道体験をしてもらった際、『色はいいが、墨をするのが面倒。インクがあれば』と。文化の違いを感じ、固形墨のかたちに固執しない文具を開発中です」

かつて墨はより生活に密着していたはずと見当をつけ、防虫効果を期待して建築木材に塗布したり、布に沈着する特性を生かしてオリジナルTシャツや手拭いなども。仕上げの際に出る端材は香袋に。墨の香りの石鹸、お香……「書く」だけにとらわれない発想で、伝統工芸を守り伝える可能性を探っています。

かつて小学校の書道の時間は二コマあり、硯で墨をするところから始まりました。墨液が誕生してから授業は一コマに。パソコン社会を迎え、手で文字を書く文化そのものが失われつつあります。旅先の社寺で御朱印をいただいたり、年賀状や書き初めなど墨書された文字を見ると、ホッとするのは人の手のぬくもりを感じられるから。

お正月、墨を硯ですって書き初めをされてはいかがでしょう。



鈴鹿墨の伝統を守り続ける伊藤さん親子。

■進誠堂 鈴鹿市寺家5-5-15
TEL.059-388-4053



■鈴鹿市伝統産業会館
「鈴鹿墨」「伊勢型紙」を紹介する資料館。古墨、青墨、現代の墨、道具、原料などを展示し、パネルで製作方法を解説。第2・4日曜10:00～16:00(12:00～13:00は休憩)晴信さんによる墨作りの実演も。入館無料、月曜休館。
鈴鹿市寺家3-10-1 TEL.059-386-7511